<原　著　論　文>

博物館における「総合的な学習の時間」への支援の内容と方法に関する考察

常磐大学非常勤職員　武子昭宗
常磐大学人間科学部　森山賢一

The consideration and support on the contents and the method of"the comprehensive learning"through the museum

A staff of Tokiwa University　Akimune Takeshi
Faculty of Human Science in Tokiwa University　Kenichi Moriyama

概要

本研究は，博物館における「総合的な学習の時間」の授業の中で，子どもたちはどのようなことに興味や関心があり，どのような形態で授業が展開されているのか，また，博物館としてこの時間を充実させるために，どのようなことに力を入れているのか，すなわち，博物館における「総合的な学習の時間」の現状をアンケート調査から探り，博物館の視点から「総合的な学習の時間」の授業への効果的な支援の内容と方法を明らかにすることを目的とする。

その結果，「総合的な学習の時間」の授業への効果的な支援の在り方として，(1)子どもの目線に立った展示づくりとワークシートの工夫，(2)体験学習プログラムの充実，(3)博物館で育む学力，(4)学校との連携の強化の4つの視点が調査の結果と考察から導き出された。

以上の結論は，学校教育における「総合的な学習の時間」の授業の充実と発展に大きな意味をもつものである。

キーワード：「生きる力」（"zest for living"），「総合的な学習の時間」（"comprehensive learning"），体験的な学習（learning by doing），展示とワークシート（exhibition and worksheet），博物館で育む学力（scholastic ability to bring up at a museum），博学連携（cooperation of a museum and a school）

1．はじめに－研究の目的－

21世紀の教育の在り方の中心課題は「生きる力」の育成にある。第15期中央教育審議会第1次答申では，「生きる力」を「自分で課題を見つけ，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，行動し，よりよく問題を解決する資質や能力」[1]，「豊かな人間性」[2]，「健康や体力」[3]として捉え，特に学校教育においては，知識を一方的に教え込む教育から子どもたちが自ら学び，自ら考える教育への基調の転換が示されている。

この答申を受けた平成10年7月の教育課程審議会答申において「教育課程の基準の改善のねらい」の一つとして「自ら学び，自ら考える力を育成すること」[4]が大きな柱として掲げられた。その中核を担うものとして位置づけられているのが平成14年度から，新学習指導要領のもとで本格実施（高等学校においては平成15年度より）されている「総合的な学習の時間」である。

この「総合的な学習の時間」の学習活動では，「国際理解，情報，環境，福祉・健康などの横断的・総合的な課題，児童生徒の興味・関心に基づく課題，地域や学校の特色に応じた課題」[5]が例示として挙げられ，ここでは自然体験や社会体験，観察，実験，調査，ものづくりや生産活動などの体験的な学習の機会の充実が求められている。つまり，子どもたちに「生きる力」を育む重要な要素として体験的な学習が強調されている。

したがって，「総合的な学習の時間」において，体験的な学習を充実したものにすることは「生きる力」を育む教育を構築するものであり，それは教育本来の在り方，すなわち「人間形成」へと結び付くものである。

ところで，「総合的な学習の時間」のねらいの大きな特徴は，生涯学習社会における開かれた学校づくりを目指して，学校教育と社会教育が一体となった学習活動の展開，すなわち，地域社会の豊かな教育資源や学習環境を有効に活用した授業づくりを積極的に進め，子どもたちが自ら学び，自ら考え，主体的に判断し行動するなど，「生きる力」の育成を図ることである。現在この「生きる力」を育む新しい学びの在り方として，多くの学校では，「総合的な学習の時間」の中で，地域の豊かな教材や学習環境を積極的に活用した授業が盛んに行われている。

そこで本研究では，地域社会に身近に存在する博物館における「総合的な学習の時間」の授業に焦点を当てることにした。なぜならば，博物館は子どもたちの興味・関心や知的好奇心を高める歴史的，教育的価値に富んだ実物資料が豊富に展示されており，子どもたちが実物と出会い，見る，触る，聞くなど身体全体で感じることを通して，自ら新たな知識やアイデアを発見し，学ぶ喜びや楽しさを味わえる格好の学習の場と言えるからである。つまり，博物館は子どもたちの豊かな実体験を通した問題解決的・探求的な学習の過程の中で，「生きる力」の育成を図るためにより高い教育効果が期待できるのである。

したがって，博物館における教育内容と方法を学校教育の「総合的な学習の時間」に取り入れ，特色ある授業づくりを展開することは，学校の教育活動に大きく貢献するものである。

このように，「総合的な学習の時間」における博物館の活用は，生涯学習社会における新しい学校教育の学びの一つの在り方として注目されなければならない課題である。

現在博物館を活用した「総合的な学習の時間」の授業の実践は，新しい取り組みであるため，試行錯誤の段階にあり，学校と博物館の間には解決しなければならない課題が山積している。特に，「総合的な学習の時間」の授業の場としての博物館は，この時間の教育プログラムの開発等，支援体制づくりを積極的に進めなければならず，その役割は非常に大きい。

そこで本研究では，今後子どもたちにとって魅力的な博物館を活用した「総合的な学習の時間」の授業を教員と学芸員の間でともに力を合わせて創造していくための一つの手がかりを博物館側に求め，博物館の視点から，現在博物館では「総合的な学習の時間」の授業がどのように展開され，子どもたちはどのようなことに興味や関心があるのか，また学芸員はどのような意識をもって，子どもたちの学習を支援しているのか，さらに博物館側の課題とは何か，すなわち，博物館における「総合的な学習の時間」の現状を探り，この時間を一層充実・発展させていくためには，博物館としてどのような支援の在り方が効果的なのかを明らかにするものである。

したがって，本研究においては，博物館側の「総合的な学習の時間」に対する実践への意識，内容と方法，課題をアンケート調査から探り，博物館の視点から「総合的な学習の時間」の授業への効果的な支援の内容と方法を明らかにすることを目的とする。

2．調査の概要

① 調査の目的

小学校において「総合的な学習の時間」が完全実施に入ってから２年目となり，博物館でこの時間の支援に携わってきた学芸員は，「総合的な学習の時間」に対して，どのような意識をもって支援をしているのか，また博物館では「総合的な学習の時間」の授業がどのように展開され，子どもたちはどのようなことに興味・関心があるのか，さらに博物館側の課題とは何か，すなわち，博物館における「総合的な学習の時間」の現状をアンケート調査から明らかにすることを目的とする。

② 調査の内容

(1) 「総合的な学習の時間」への支援の状況

(2) 「総合的な学習の時間」を支援する理由

(3) 「総合的な学習の時間」への支援の内容

(4) 「総合的な学習の時間」を支援しない理由

(5) 博物館における授業形態

(6) 博物館での子どもの興味や関心

(7) 博物館側の今後の課題

③ 調査期間

平成 16 年 8 月 9 日～平成 16 年 9 月 30 日

④ 調査方法

郵送法

⑤ サンプリング

本調査は㈶日本博物館協会の平成 15 年度版の会員名簿に登録されている計 1212 館の中から関東近県の博物館 66 館を有意抽出した。その際に選択の基準は設けなかった。

⑥ 有効回収数・有効回収率 有効回答数・有効回答率

計画標本数 66　有効回収数 56　有効回収率 85％　有効回答数 40　有効回答率 61％

3．調査の結果と考察

(1)「総合的な学習の時間」への支援の状況に関する調査の結果と考察

a．「総合的な学習の時間」への支援の状況に関する調査の結果

① 「総合的な学習の時間」として博物館を利用する学校に対して，博物館はどのような支援をしているのかについて問うた。

(1) 積極的に支援している 21 館（52.5％）

(2) できるだけ支援するようにしている 18 館（45％）

(3) とくに支援していない 1 館（2.5％）

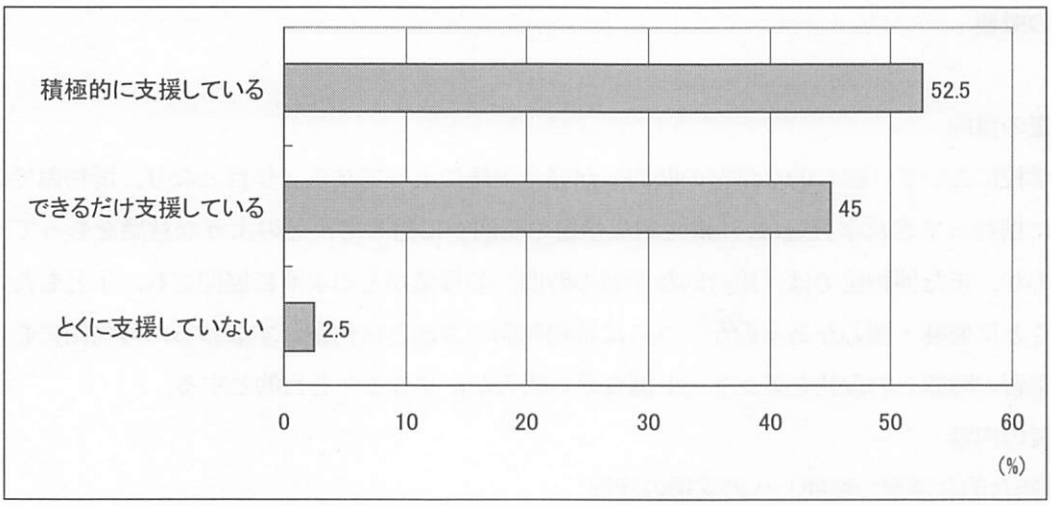

図１　「総合的な学習の時間」への支援の状況

ｂ.「総合的な学習の時間」への支援の状況に関する調査の考察

図１の調査の結果より,アンケートに回答した博物館 40 館中 21 館（52.5％）は「総合的な学習の時間」として博物館を利用する学校に対して積極的に支援を行うと回答を示した。次に積極的とはいかないまでも，できるだけ支援を行うと回答を示した博物館は 18 館（45％）であった。特に支援をしていないと回答を示した博物館はわずか１館（2.5％）だけであった。

これまで博物館の学芸員と学校教員の博物館での学校教育支援や展開についての意識は，学校の社会科，理科，美術科の授業や遠足，修学旅行などの学校行事の見学場所という認識が強く定着しており，博物館の教育内容と方法を積極的に取り入れた授業の実践事例は極めて少ない。その理由は，学校教育の教育課程と博物館の研究分野は関連性が少なく，学校における計画性のある系統的なカリキュラムに博物館の教育活動を組み込むことは難しいからである。したがって，両者ともお互いのメリットを十分に理解し合えない状況が続いていた。

しかし，地域の教育資源を生かしながら，教科の枠を超えて，横断的，総合的な学習活動，児童生徒の興味・関心に基づく学習活動，地域や学校の特色に応じた学習活動等を特色とする「総合的な学習の時間」の創設を契機に，博物館側は博物館特有の教育資源を効果的に学校教育に活用できる機会が生まれ，「総合的な学習の時間」を支援する体制を充実させるために，積極的に学校教育支援の準備を進めている現状にあることが調査の結果から明らかになった。

⑵「総合的な学習の時間」を支援する理由に関する調査の結果と考察

ａ.「総合的な学習の時間」を支援する理由に関する調査の結果

②　①で⑴積極的に支援している又は⑵できるだけ支援するようにしているを選んだ理由について問うた。

⑴　「『総合的な学習の時間』を博物館で展開する教員に協力することにより，博物館と学校の連携の促進を図るチャンスになる」は 31 館（40％）である。

⑵　「博物館は『総合的な学習の時間』を展開するうえで豊富な資源があり，格好の場である。」は 29

館（37%）である。

⑶「子どもたちの博物館ファンを増やし，利用者の増加につなげることができる」は14館（18%）である。

⑷「博物館職員にとって学校教育の理解を深める機会になる」は2館（2.5%）である。

⑸「その他」は2館（2.5%）で，具体的には，「博物館で人とものにふれあうことは，子どもたちの生きる力を育てる一助となる」，「博物館を利用しようとする人には個人であれ団体であれできるだけの支援をするのは当然のことだから」とある。

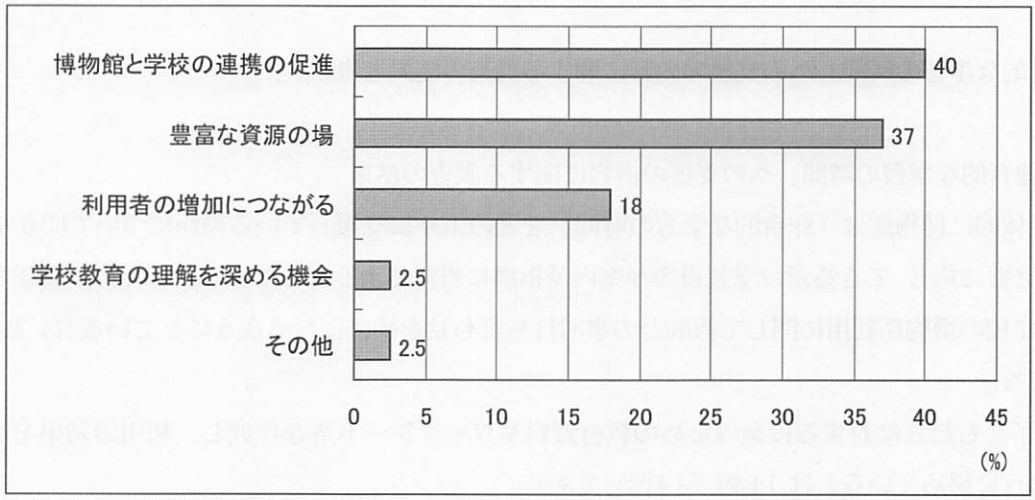

図２「総合的な学習の時間」を支援する理由

⑵「総合的な学習の時間」を支援する理由に関する調査の考察

図２の調査の結果より，博物館が学校の「総合的な学習の時間」の支援を行う大きな理由として次の３点が明らかになった。

１．「『総合的な学習の時間』を博物館で展開する教員に協力することにより，学校と博物館の連携の促進を図るチャンスになる」31館（40%）

２．「博物館は『総合的な学習の時間』を展開するうえで，豊富な資源があり，格好の場である」29館（37%）

３．「子どもたちの博物館ファンを増やし，子どもの利用者の増加につなげることができる」14館（18%）

博物館が学校教育支援を行う大きな理由は，調査の結果から明らかであるように，博物館には子どもたちの知的好奇心を高める実物資料が豊富に展示されており，「総合的な学習の時間」の中で体験的な学習や問題解決的・探求的な学習を積極的に支援するための教育内容と方法を蓄積しているという大きなメリットがあるからである。これに関連して，博物館の教育内容と方法を効果的に「総合的な学習の時間」の中に組み込み，教員とともに授業を進めることは，学校との連携の促進を図る上で大きなチャンスになることも調査の結果から明らかである。

さらに調査の結果から，「総合的な学習の時間」は子どもたちの博物館ファンを増やし，子どもの利用者の増加につながる大きなきっかけになるということも博物館が「総合的な学習の時間」の支援を行う理由として注目されなければならない。

なぜならば，学校との連携がうまく促進され，子どもたちの心に博物館の授業の楽しさや面白さが根付くと，子どもたちの博物館への興味・関心が芽生え，博物館での学習意欲が高まり，博物館で学んだ学習課題を自分の課題として捉え，学校の休日である土曜日や日曜日にも親子で博物館に足を運び，親子でコミュニケーションを図りながら，自らの好奇心に従って意欲的に進んで課題を見つけて，学習に取り組むことが考えられるからである。

したがって，博物館には子どもの目線に立った展示工夫や教育プログラムの開発などの企画を工夫することで，「総合的な学習の時間」の授業をより充実させる支援の在り方が求められる。これは博物館の運営上大きなメリットになる。

(3)「総合的な学習の時間」への支援の内容に関する調査の結果と考察

a.「総合的な学習の時間」への支援の内容に関する調査の結果

③ 具体的に博物館は「総合的な学習の時間」をどのように支援しているのかについて問うた。

(1) 「必要に応じ，できるだけ学芸員等が案内や指導に当たるようにしている」は 26 館（33%）である。

(2) 「学校の博物館利用に関して教師との事前打ち合わせを綿密に行うようにしている」は 22 館（28%）である。

(3) 「子どもたちに対する授業のための教材資料やワークシート等を作成し，利用の効果を高めてもらうように努めている」は 11 館（14%）である。

(4) 「展示だけでなく，科学教室や歴史の学習などの教育プログラムを用意し，参加できるようにしている」は 10 館（13%）である。

(5) 「入場料金について特別配慮をしている」は 9 館（12%）である。

(6) 「展示をはじめ施設設備の充実に力を入れている」は回答なしである。

(7) 「その他」は回答なしである。

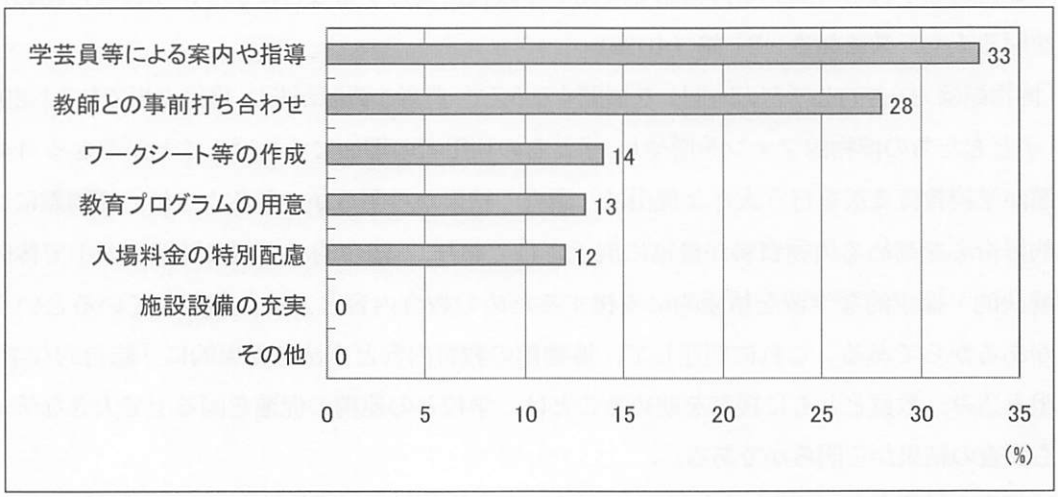

図３ 「総合的な学習の時間」への支援の内容

b.「総合的な学習の時間」への支援の内容に関する調査の考察

図３の調査の結果より，博物館が「総合的な学習の時間」の授業への支援として最も力を入れているのは，学芸員による案内や指導であった。つまり，博物館における授業では，学芸員の役割が重要になる。しかし，学芸員が展示を解説するだけの授業は，子どもたちにとって充実と発展性のある授業とはいえない。そこで授業の在り方として，学芸員は教員とティーム・ティーチングを組み，授業を展開することが子どもたちにとって有効であろう。したがって，学芸員にも教員とともに授業を構築していく力量が求められる。ここで重要なことは，調査の結果から明らかであるように，教員と授業の事前打ち合わせを綿密に行うことである。

学芸員はこの事前打ち合わせで学校側の実態や子どもたちの発達段階を把握している教員から子どもたちの情報を細かく収集し，学校側のねらいを十分に汲みとり，子どもたちにとって効果的な支援の内容と方法を教員とともに時間をかけて検討する必要がある。

また，授業への支援として学芸員は教材資料やワークシートの作成にも力を入れていることが調査の結果から明らかになった。

特にワークシートは，イラストや写真を効果的に使いながら，子どもたちが展示や実物資料を見たり，触わることを通して，気付いたことや感じたことやわかったことなどを確かめることができるように，具体的なわかりやすい問いと解説の構成で作成されている。

したがって，ワークシートは子どもたちが展示や実物資料に興味や関心を抱き，親しみをもつきっかけになり，子どもたちの授業理解の手助けになるが，子どもたちが展示や実物資料を見ながら，設問に答え解説で確認するという方法のみでワークシートを使用するのであれば，授業の教材としては不十分であろう。

ここでは，ワークシートの活用法についての創意と工夫が求められるのである。例えば，学芸員が作成したワークシートをもとに，子どもたち一人一人が展示や実物資料を見たり，触わることを通して，「なぜだろう？」という疑問の答えをまるで自分たちの力で発見し解決したかのようなオリジナルの問題発見解決型の授業ノートを新しい発想でつくり，学習の成果としてポートフォリオにまとめる方法も一つであろう。このポートフォリオにまとめる作業は，子どもたちにとって発展的な学習になり，子どもたちが体験的に学んだ心のアルバムとして，教員は貴重な評価の資料として使うことができる。

このような視点からワークシートは，博物館における「総合的な学習の時間」の充実には重要な位置を占める。

ところで，博物館は授業の支援だけでなく，学校の休日である土曜日や日曜日，夏休みなどの長期休暇を利用して，実に多彩な教育プログラムの開発に努めていることが調査の結果から明らかになった。例えば，科学教室，歴史教室，実験教室，工作教室，野外自然観察会やワークショップなどを挙げることができる。

このように，学芸員は子どもたちに展示を視覚的に見せるだけでなく，実際に子ども自身が五感全てを使って体験することによって，実物についての知識を体得させるような教育プログラムを開発し，子どもたちが自ら進んで参加できるような魅力的な企画を工夫し準備を進めているのである。

⑷「総合的な学習の時間」を支援しない理由に関する調査の結果と考察

a.「総合的な学習の時間」を支援しない理由に関する調査の結果

④ ①で⑶とくに支援していないを選んだ理由として，どのようなことが考えられるのかについて問うた。

⑴ 「博物館側に教員を支援するだけの人的体制が整備されていない」は 1 館（50%）である。

⑵ 「『総合的な学習の時間』を支援するにふさわしい展示や施設設備が十分でない」は 1 館 50（%）である。

⑶ 「子どもたちの主体的な学習をねらいとしているといいながら，子どもを放任したり，明確なねらいや計画ももたずに来館しているようにみえる」は回答なしである。

⑷ 「博物館と学校との日常的な関係が希薄である」は回答なしである。

⑸ 「その他」は回答なしである。

b.「総合的な学習の時間」を支援しない理由に関する調査の考察

図 1 の調査の結果より，「総合的な学習の時間」をとくに支援していないと回答した博物館はわずか 1 館（2.5%）だけであった。

その大きな理由としては,「博物館側に教員を支援するだけの人的体制が整備されていない」ことと「『総合的な学習の時間』を支援するにふさわしい展示や施設設備が十分でない」ことが挙げられる。

つまり，規模が小さい博物館は，学芸員を雇用する人件費や博物館の施設設備費など特に予算面で大きな制約があり，人的体制と物的体制を十分に整備することが難しい現状にある。

したがって，規模が小さい博物館は，強い個性を発揮して特色ある博物館づくりを進め，利用者の増加を促すことが運営上の大きな課題であろう。

⑸ 博物館における授業形態に関する調査の結果と考察

a. 博物館における授業形態に関する調査の結果

⑤ 学校の「総合的な学習の時間」として，博物館が利用される場合，どのような形態が多いのかについて問うた。

⑴ 「子どもたちのグループによる展示見学」は 28 館（35%）である。

⑵ 「学芸員（又はボランティア）による展示説明」は 19 館（23.8%）である。

⑶ 「学芸員（又はボランティア）による体験学習の指導」は 16 館（20%）である。

⑷ 「学芸員と教員の協力による指導」は 6 館（7.5%）である。

⑸ 「教育プログラムへの子どもたちの自主的参加」は 4 館（5 %）である。

⑹ その他は 7 館（8.8%）で，具体的には，「昔の道具の貸し出し」,「講師派遣による学芸系職員の授業への参加及び教育的資料の貸し出し」,「質問対応」,「資料を学校に持って行く出前授業」,「保護者と一緒に来館して利用」,「学習支援事業（出前講座）による協力」とある。

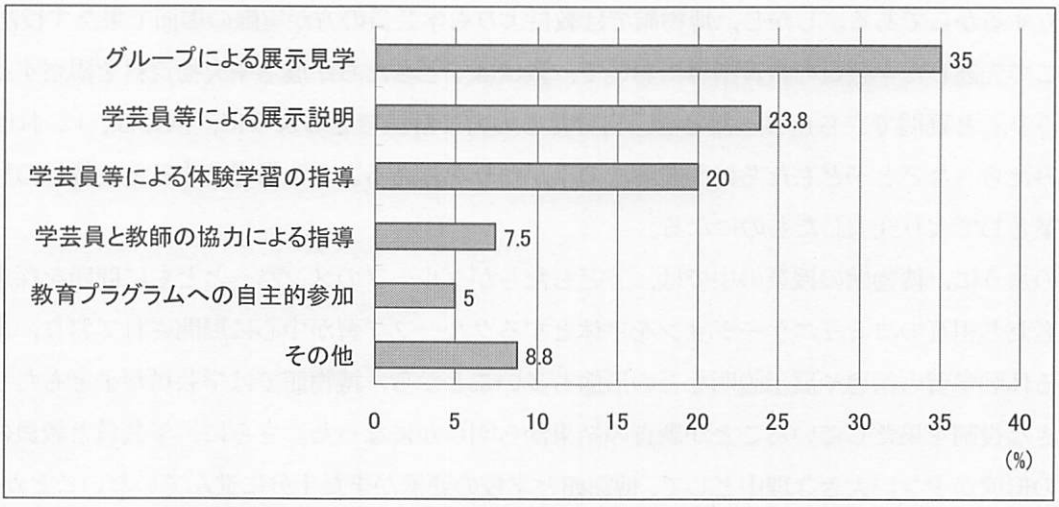

図４　博物館における授業形態

ｂ．博物館における授業形態に関する調査の考察

図４の調査の結果より，博物館における「総合的な学習の時間」の授業形態としては，グループ学習が最も多いことが明らかになった。博物館でのグループ学習の特徴は，一つの大きなテーマからグループごとに課題を持ち，展示や実物資料を見たり，触ることを通して，ワークシートを利用しながら，グループのメンバーとともに考えたり，調べたりして，まとめとしてグループごとに発表をして，子どもたち全員で問題の解決を図るという点にある。

この学習のメリットは，子どもたちが展示や実物資料を自分の目で見たり，手で触ったりと五感を使いながら，じっくりと比較，観察するなかで，例えば，「なぜ，このような形や色をしているのだろうか」，「他の資料とどこが違うのだろうか」等の疑問をグループのメンバーとともに考えたり，調べたりして，課題を一つ一つ解決していくプロセスの中で，メンバー一人一人の様々なものの見方や考え方を学び，そこでお互いのよさを再発見し，濃密な人間関係を体験を通して築くことができることにある。

以上のことから，博物館でのグループ学習は，子どもたちが博物館で学ぶ力，すなわち，問題解決能力・課題発見能力・学び方・思考力・判断力・表現力・想像力・コミュニケーション力を育てる大きな教育効果がある。このことから教員は博物館の授業の中で子どもたちにこの形態で学習させることが最も多いのではないかと考えられる。

続いて，博物館では学芸員による展示の情報を視覚的に子どもたちの立場に立ってわかりやすく説明する指導と子どもたちに体験的に学習させる指導の形態が多いことも調査の結果から明らかになった。

したがって，学芸員は子どもたちが展示や実物資料に興味を持ってもらうように，例えば，授業の導入では「これは何に使うと思いますか」などと子どもたちの疑問や想像力が沸き起こるような問いかけから始めて，子どもたちの身近な生活の事物に関連付けたわかりやすく説明する指導と，子どもたちが身体全体を使いながら体験的に学習できる指導を相乗的に充実させて，子どもたちの自発性を引き出す支援の在り方も検討しなければならない。

また少数ではあるが，学芸員と教員がお互いの持ち味を生かして協力する指導の形態にも注目しなければならない。なぜならば，博物館での「総合的な学習の時間」の展開は，学芸員と教員が協力してはじめ

て成立するからである。しかし，博物館では教員よりも学芸員の方が実際の場面で果たす役割が大きい。

そこで先述した学芸員の教育指導において，教員は子どもたちが展示や実物資料を観察する中で「なぜだろう？」と疑問で立ち止まったとき，自分たちの力で解決できるように，例えば，「これはここに注目してみたら」などと子どもたちに問題解決の手がかりを与えるような指導をすると，教員の利点を生かした授業としてより充実したものになる。

このように，博物館の授業の中では，子どもたちがグループのメンバーとともに問題を探求・解決する子どもたち相互のコミュニケーションを主体とするグループ学習が中心に展開されており，また，学芸員による体験学習の指導や展示説明などの形態も多いことから，博物館では学芸員が子どもたちの学習支援に大きな役割を果たしていることが調査の結果から明らかになった。さらに，学芸員と教員の協力による指導の形態が少ない大きな理由として，博物館と学校の連携がまだ十分に進んでいないことが挙げられる。今後このような指導の形態を博物館の授業の中で増やしていくためには，学芸員は教員とともに授業での連携の在り方について時間をかけて十分検討する必要があろう。

(6) 博物館での子どもの興味や関心に関する調査の結果と考察

a．博物館での子どもの興味や関心に関する調査の結果

⑥ 博物館を利用した学校の子どもたちが，興味や関心を示したことにどのようなものがあるのかについて問うた。

(1) 「体験学習プログラム（実習，実験，観察などを含む）への参加」は 26 館（33%）である。

(2) 「学芸員やボランティアへの質問や相談」は 24 館（30%）である。

(3) 「ワークシートや課題をもとにした展示見学」は 17 館（21%）である。

(4) 「体験型展示」は９館（11%）である。

(5) 「パソコンコーナーでの学習」は３館（４%）である。

(6) 「ビデオ閲覧室での学習」は１館（１%）である。

(7) 「その他」は回答なしである。

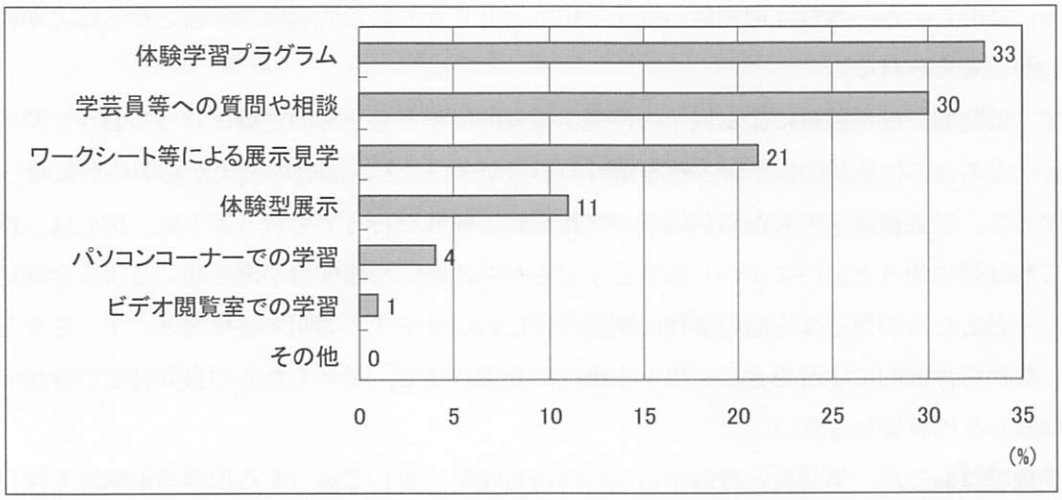

図５　博物館での子どもの興味や関心

b．博物館での子どもの興味や関心に関する調査の考察

図５の調査の結果より，子どもたちが展示を実際に触り，動かしながら，展示の情報を感覚的に理解するハンズ・オンと呼ばれる体験型展示と創作活動や実験，観察，実習など子どもたちが身体全体を使いながら，実物と触れ合うことができる体験学習プログラムが，子どもたちの心に体験の深まり，すなわち，内的感動や満足感を実感させるものであることから，博物館の授業の中では，特に子どもたちの心に印象が残る魅力的な学習であったことが明らかになった。

実物との出会いの体験は，子どもたちに驚きと感動を与え，子どもたちの心に豊かな情操や感性の発達を育み，子どもたちの心性を開発する上で大きな効果がある。

したがって，博物館は体験学習プログラムと体験型展示の内容を一層充実させることが必要である。

また，学芸員やボランティアとの出会いやワークシートを活用した学習も，子どもたちの心に残る貴重な体験であったことが調査の結果から明らかになった。

博物館の授業では，子どもたちはワークシートを使って，展示や実物資料を見たり，触りながら，課題について考えたり，調べたりして，気付いたことやわかったことを記入して学習を進めていくことに大変魅力を感じており，そこでどうしても調べてわからないことや，子どもたちの興味や関心のある疑問に，展示を効果的に活用しながら，子どもたちの立場になってわかりやすく答えてくれる存在が学芸員とボランティアである。

すなわち，学芸員やボランティアは子どもたちの知的好奇心を満たす魅力的な存在であり，ワークシートを活用した学習も，子どもたちの探検・冒険心を刺激し，子どもたちに学ぶ喜びや楽しさを実感させるものである。

さらに少数ではあるが，パソコンコーナーやビデオ閲覧室での学習に興味や関心を示す子どもたちもいることが調査の結果から明らかになった。

パソコンやビデオは，展示の情報を具体的にわかりやすく解説し，子どもの発達段階を考慮したクイズ形式の問題を取り入れるなど，子どもたちが楽しく学習できるような内容構成となっており，子どもたちの授業理解の手助けとして有効である。

このように，博物館における「総合的な学習の時間」の授業では，子どもたちは展示や実物資料を見たり，触ったりと五感を使って，学芸員とのコミュニケーションを図りながら，課題について考えたり，調べたり，創作したりする知的な体験を通した学習にとても魅力を感じていることが調査の結果から明らかになった。

(7) 博物館側の今後の課題に関する調査の結果と考察

a．博物館側の今後の課題に関する調査の結果

⑦ 「総合的な学習の時間」として博物館が利用される場合，博物館としては今後どのようなことに力を入れる必要があるのかについて問うた。

(1) 「学校との連携強化の方策について積極的に進める」は 22 館（27.5％）である。

(2) 「学芸員をはじめ指導担当者が『総合的な学習の時間』の在り方等についてさらに理解を深め，効

果的な指導方法について研究する」は21館（26.3%）である。

(3) 「子どもたち一人一人のニーズに対応できるような展示内容や教育プログラムの充実に努める」は15館（18.8%）である。

(4) 「『総合的な学習の時間』の効果をあげるために，学芸員だけで行うのではなく，地域の人々（ボランティア）の協力が得られるような体制づくりが必要である」は10館（12.5%）である。

(5) 「学校教育の支援には博物館活動の充実が重要であり，そのための財政的援助が得られるような行政当局への働きかけが不可欠である」は9館（11.3%）である。

(6) その他は3館（3.8%）で，具体的には，「博物館の活用方法について教職員の理解を得ることが必要と思われる」と「学校側と細かな所までの事前打ち合わせ」と「どのような学習にも対応できるように，地域の歴史・文化に関する情報やモノ資料をなるべく多く収集する」とある。

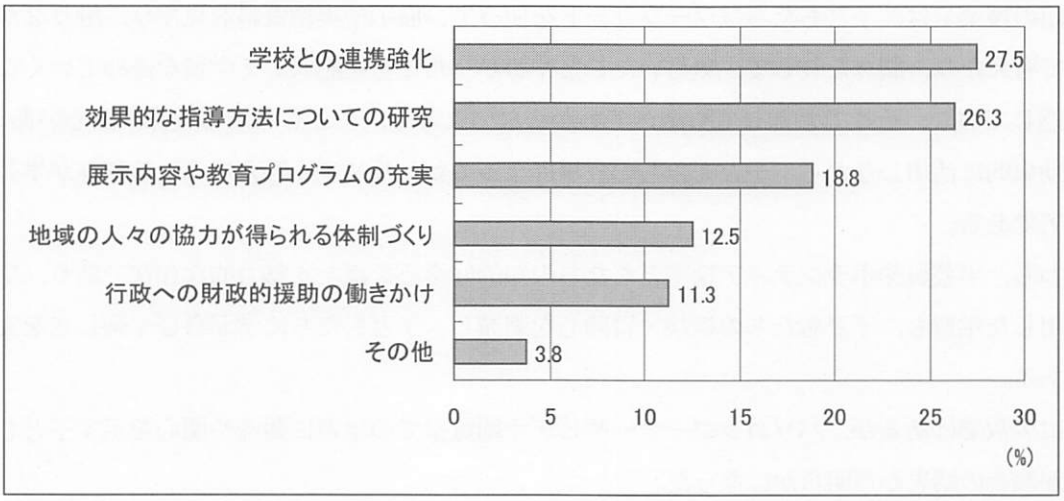

図6　博物館側の今後の課題

b．博物館側の今後の課題に関する調査の考察

図6の調査の結果より，今後の博物館側の大きな課題として，以下に3つ挙げることができる。

第1に，学校との連携強化の方策を積極的に進めることである。学校との連携の具体的な方策としては2つの大きな方法的側面がある。それは子どもたちが博物館で学習する方法と博物館の学芸員が学校へ行き子どもたちに直接授業を行う出前授業の方法である。

いずれの方法にも共通して重要なことは，博物館の利用が「総合的な学習の時間」の年間指導計画の中にどのように位置づけられるかということである。

その際，初めに学芸員は教員に「総合的な学習の時間」のねらいのどの部分で博物館を利用し，どのようなテーマで子どもたちに学習させるのかといったコンセプトをはっきりと決めてもらい，次に教員とともにそのねらいを実現するために授業の内容と方法について事前に綿密な打ち合わせを十分に行わなければならない。

さらに未来への展望として，インターネットやテレビ会議システムなどネットワークを活用した遠隔授業を挙げることができる。これは九州地方の博物館と学校で数多く見られる先進的な実践である。

この授業は博物館の展示を動画や写真等の映像情報を通して，子どもたちが教室で博物館から借りた標本キットや剥製，実験機材などの資料を触りながら，教員の説明を受けて，博物館の学芸員にインターネットやテレビ会議システムで講義を受け，必要に応じてメールで博物館の学芸員に質問を送るという形態で行われている。

現在このような情報技術を活用したよりよい授業の方法も検討されなければならない時期に差し掛かっている。

今後はコンピューターなどの情報技術が，博物館と学校の連携さらには融合を一層推し進める手段として期待されることに間違いないだろう。

第２に，学芸員は子どもたちにとって博物館で育む学力とは何か，また子どもたち一人一人は何を求めているのかという学習ニーズを知り，子どもたちが興味を持って楽しく自発的に学びたくなるような教材資料とワークシートの作成を進めて，子どもたちにとって魅力的な「総合的な学習の時間」の授業の開発とその効果的な指導方法の在り方について教員とともに研究を深めていかなければならない。

第３に，博物館を活用した「総合的な学習の時間」が子どもたちにとってより一層実り多い時間として発展していくためには，学芸員と教員だけでなく，青年，中高年，主婦，高齢者など地域住民の中で多様な経験を持つ人々がボランティアとして授業に参加し，子どもとのコミュニケーションを豊かなものにしていかなければならない。

すなわち，博物館における「総合的な学習の時間」の授業では，子どもたちは，「ものとの触れ合い」と「人との触れ合い」を同時に体験できることに大きなメリットがある。

4．おわりに－研究のまとめ－

これまでの調査の結果と考察から，博物館における「総合的な学習の時間」の授業への効果的な支援の在り方として，次の４つの視点が導き出された。

(1) 子どもの目線に立った展示づくりとワークシートの工夫

子どもの目線に立った展示づくりとワークシートの工夫は車の両輪であり，博物館の教育プログラムの要である。つまり，このことは博物館の授業の中で子どもたちの活動の主軸になるものであり，子どもたちのニーズを直接反映させた内容のものにすることが学芸員に求められている。

ここで子どもの目線とは，大人の立場から子どもの観点で物事を考えることを意味する。つまり，展示開発を進める上で，子ども理解がキーポイントになる。しかし，一般の博物館で子どもを対象にした展覧会を実施することは極めて難しい現状にある。したがって，現段階で学芸員は「総合的な学習の時間」の授業の中で，子どもたちの発達段階に配慮した子どもたちの心をつかむ展示づくりを工夫しなければならない。

その展示を構成する目的原理として次のようなことが考えられる。それは子どもたちにとって「よくわかる」[6] 展示である。つまり，子どもたちが「よく理解できる」展示でなければならない。

それは子どもたちが展示のストーリーを通して，ワークシートを利用しながら，課題を自分たちの力でまるで初めて発見したかのようにして解決し，問題発見・解決的に理解できるわかり方，すなわち，「構

造的理解」[7]から「全心的理解」[7]へと子どもたちが導かれるのが，子どもたちにとって「よくわかる」展示であり，これが子どもの目線に立った展示づくりの真髄である。

ワークシートは子どもたちが展示の情報を確実に理解できる適切な教材であり，展示と子どもたちの間を結びつける重要な教材である。

したがって，学芸員には博物館独自のワークシート以外にも，「総合的な学習の時間」に対応したオリジナルのワークシートを教員と協力して作成して授業に活用することが求められる。

(2) 体験学習プログラムの充実

体験学習プログラムも博物館の教育プログラムの要であり，学芸員は「総合的な学習の時間」の授業への支援の中では最重要視しなければならない。なぜならば，体験学習は子どもたちが自分の目で見たものを自分の手で触ったり，身につけたり，作ることを通して，そのものの本質を身体全体で感じ取り，生きて働く本物の知識やアイデアを習得できるという大きなメリットがあり，授業の中で子どもたちが最も目を輝かせ，生き生きと心を弾ませて活動する学習だからである。つまり，子どもたちにとって体験学習が充実したか否かで，その授業の成否が決まるといっても過言ではない。

したがって，学芸員は子どもたちが身体全体を使うことを通して，その体験から事物についての認識を高め，それを学習経験としてより深めて，新たなものを創出する自由な発想を育むことができ，子どもたちの心性を開発する内容の教育プログラムを充実させなければならない。

(3) 博物館で育む学力

子どもたちに博物館で学ぶ時間を保証するためには，博物館で育む学力を明確にしなければならない。

では，博物館で育む学力の「学力」とはどのような意味なのか。森山賢一は，学力を「知識・技能」，「問題解決能力・課題発見能力・学び方・思考力・判断力・表現力・想像力・コミュニケーション力」，「関心・意欲・態度」の３つの領域から捉えている。[9] つまり，学力とは単に知識・技能を習得することだけが目的ではないことが明らかである。問題解決能力，課題発見能力，学び方，思考力，判断力，表現力，想像力，コミュニケーション力，関心，意欲，態度も学力を構成する重要な要素である。これは「生きる力」を育む大きな要素である「確かな学力」と共通するものである。すなわち，この学力観が博物館で育む学力のバックボーンになる。

この中で博物館の授業では，「知識・技能」と「問題解決能力・課題発見能力・学び方・思考力・判断力・表現力・想像力・コミュニケーション力」の２つの領域が核となり，これを「関心・意欲・態度」が支える構造になる。なぜならば，博物館の授業では，子どもたちは活発な自己活動によって，学ぶ内容と方法が表裏のような連関の中で同時的に習得されなければならないからである。

したがって，学芸員は教員とともに，子どもたちに展示や実物資料を見せたり，触らせたりして，子どもたちの冒険・探検心を引き出し，身体全体を使う体験を通して，課題を自分たちの力でまるで初めて発見したかのようにして解決させて，そこで知識や技能を習得させながら，学ぶ力（学ぶ方法，問題解決能力等）を身に付けさせなければならない。つまり，博物館の授業ではこのような学習プロセスを通して，子どもたちの人間形成につながる発展性のある学力を形成しなければならない。

さらに，この三位一体の学力を支える土台として，子どもたちの学ぶ楽しさや面白さと充実感を挙げることができる。この学ぶ楽しさや面白さと充実感を子どもたちにどれほど実感させることができるか

が，博物館の大きな使命である。したがって，この実現には先述した(1)子どもの目線に立った展示づくりとワークシートの工夫と，(2)体験学習プログラムの充実の２つの視点，つまり，教育内容面からの充実が大きな鍵であろう。

(4) 学校との連携の強化

教育方法面からの充実としては，学校との連携の強化が大きなポイントになる。その具体的な方策としては博物館学習と出前授業の２つの方法が考えられる。いずれの方法にも共通して重要なことは，授業での学芸員と教員の連携，すなわち，学芸員と教員の協力した授業をいかに充実させることができるかである。なぜならば，博物館を授業で活用する場合，その多くは学芸員による展示や実物資料の解説を中心とした授業が展開されており，教員は授業を見守る補助的な立場にあるからである。つまり，このような学芸員を中心とした授業の形態では，学校との連携が十分に機能しているとは言い難い。したがって，学芸員は教員とともに「連携」の意味を十分吟味し，それを踏まえた上で教員と協力した授業を展開しなければならない。

では，博物館と学校の連携，すなわち，「博学連携」とはどのような意味なのか。「学社連携」の意味から「博学連携」の授業について考えてみたい。

1996（平成８）年の生涯学習審議会答申「地域における生涯学習機会の充実方策について」では，「地域住民のニーズにこたえる社会教育・文化・スポーツ施設」の項で，学社連携にふれ，学社連携とは，「学校教育と社会教育がそれぞれ独自の教育機能を発揮し，相互に足りない部分を補完しながら協力しようというもの」[10] であるとしている。

さらに，林部一二は，社会教育施設を学校の授業で活用する場合のポイントとして，「両者の共同による授業計画（教育課程）の作成，教師と施設職員との責任分担と協力，経費計画など，具体的な措置を処理」[11] することをあげている。つまり，「学社連携」とは独自性と相互補完性と協同性がキーポイントになる。

したがって，この意味から「博学連携」の授業とは，学芸員と教員どちらか一方が主体になるのではなく，両者がそれぞれ主体となり，自分の役割を明確にした上で，独自の教育方法をとりながらも，相互補完的に協力して授業を展開することである。

その際，授業の事前打ち合わせで，「総合的な学習の時間」の年間指導計画にどのように博物館の教育活動を組み込み，その効果的な活用を図るのか，また「連携」を実現する上で何が困難な問題となっていて，どう克服すべきなのかを教員とともに時間をかけて十分検討することが，学校との連携を推進・強化する上で大きなポイントであろう。

博物館は以上４つの視点の充実を図り，現代の生涯学習社会の中で，子どもたちの「生きる力」を育む教育を実現するために，学校とともに足並みを揃えて歩き，一人でも多くの博物館好きな子どもたちを育て，地域社会における子どもたちの学びの文化の発信地になることを期待したい。

付記

この調査を実施するにあたり，㈶日本博物館協会の平成 15 年度版の会員名簿に登録されている全国 1212 館中の 66 館の博物館職員の皆様には，有効なデーターをご提供いただきました。心から深く感謝申し上げます。

註

1）中央教育審議会（1996 .7.19）「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）」文部省

2）中央教育審議会（1996.7.19）「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）」文部省

3）中央教育審議会（1996.7.19）「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）」文部省

4）教育課程審議会（1998.7.29）「幼稚園，小学校，中学校，高等学校，盲学校，聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について（答申）」文部省

5）教育課程審議会（1998.7.29）「幼稚園，小学校，中学校，高等学校，盲学校，聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について（答申）」文部省

6）髙久清吉（1990）『教育実践学　教師の力量形成の道』教育出版 P．130 ～ 133

髙久清吉は，「わかる」原理を教授学の視点から，「はっきりわかる」と「深くわかる」の二つの意味で解釈している。まず「はっきりわかる」とは，子どもたちが展示を「構造体として筋道立てて理解すること」であると述べ，これを「構造的理解」と呼んでいる。次に「深くわかる」とは，子どもたちが展示内容の本質部分に触れ，「なるほど」と嘆声がもれるほど，「心の底までゆり動かされる」ようなわかり方であると示し，これを「全心的理解」と述べている。

7）前同書 P．132

8）前同書 P．133

9）森山賢一（2006.8.23）「学習内容の確実な定着を図る教育方法及び授業原理」平成 18 年茨城県立農業大学校教職員研修　講演資料

10）生涯学習審議会（1996.4.24）「地域における生涯学習機会の充実方策について」文部省

11）林部一二（1976）『学校教育と社会教育－学・社連携の理念と運営－』明治図書 P．48 ～ 51